

讃岐路の名所・旧跡を歩く

— 崇徳上皇・源平合戦・玉取伝説 —



愛媛大学法文学部教授
四国遍路・世界の巡礼研究センター長
胡 光
(えべす ひかる)

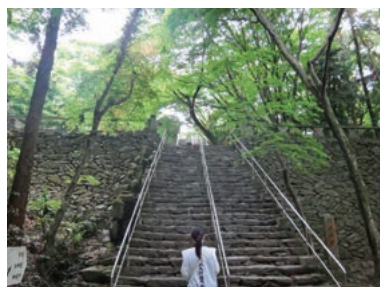
讃岐の札所

津屋崎村（福岡県福津市）の豪商佐治家一行7人が、江戸時代の弘化2年（1845）に行った四国遍路の記録「四国日記」（佐治洋一氏蔵、福岡県立図書館保管）を読み進めます。船で三津浜に上陸し、太山寺を打ち初めに四国を北上、55日で一周します。日記には、日々の歩いた距離、札所数、接待数、宿泊場所、費用、食事などが詳細に記録されており、今回は、弘法大師誕生所善通寺を拝し、金毘羅見物をした後に進んだ、讃岐路の様子について紹介します。

3月27日早朝に訪れた七十六番札所金倉寺（善通寺市）を皮切りに歩みを進めます。このあたりの中讃地域では、備中国（岡山県）から接待に来ており、接待の地「四国」の特徴がみえます。金倉寺では、銭・草鞋・はったい粉・香物、七十七番道隆寺（多度津町）では、餅など多種多様な接待がありました。

以後の讃岐路は、八十八番大窪寺（さぬき市）をはじめ、いくつかの山岳寺院がありますが、伊予路の横峰寺・三角寺や雲辺寺で記された「厳しい急坂」「急で長い坂」のような困難な表現はなく、平地といくつかの坂道を繰り返し越えていきます。ただ道程が全体の四分の一を超える頃には、疲れも溜まってきたようで、宿にて繰り返し灸をすえています。

山上の札所では、その景色を楽しんでいます。八十二番根香寺では、「石段が高く景色が良い。目下に高松城下を見下ろし、右に屋島・八栗があり、島々が見えて、源平の古戦場の様子をしばらく見る」と記されます。



八十二番根香寺の石段

崇徳上皇の旧跡

讃岐路では、源平古戦場のような名所・旧跡の記録が目につきます。

七十九番崇徳天皇社（天皇寺・坂出市）は崇徳上皇を祀る御宮とあり、八十一番白峯寺（同市）も崇徳上皇の御霊を祀ることが記されていて、平安時代末の保元の乱で敗れ、讃岐に流された崇徳上皇ゆかりの旧跡が紹介されます。

さらに、白峯寺には、上皇の霊をなぐさめるために源頼朝が建てたという石塔や多数の門の存在が記されており、これらの建造物は現在、国指定重要文化財となっています。上皇と交流のあった西行が白峯寺にある上皇の墓に参った時、上皇の怨霊が現れる話は、江戸時代に上田秋成が著した小説『雨月物語』に収録され、広く知られていました。このような上皇の記憶をとどめる白峯寺には、下馬石があり、大名でも乗物を降りることも記されています。

元禄2年（1689）に寂本が著した『四国徧礼霊場記』に、天皇社は神社建築の本殿が描かれています。八十三番一の宮（高松市）も現在の一宮寺ではなく、隣接する田村神社でした。同書には田村大

明神の本殿が描かれます。一方で、日記には、神社であることは認識しながらも、本尊は、正観音菩薩と記し、神も仏も同時に拝する神仏習合の日本文化の様子がよく分かります。

この後、すでに紹介した通り、法然上人が讃岐に流されたときのゆかりの寺である法然寺にも参詣しています。

源平合戦の記憶

「高松」城下町の名は、屋島の対岸にある源義経ゆかりの源平合戦地の名をとって、城を築いた生駒親正が名付けたもので、その後、松平家の治める城下町として栄えます。元々の「高松」の地は「古高松」と呼ばれて源平合戦の記憶をとどめています。

八十四番屋島寺は、源平合戦の時からある古寺と記され、途中、佐藤継信の墓や洲崎寺にも参っています。継信は、屋島合戦の時に平教経が放った矢を義経の代わりに受けて亡くなり、洲崎寺の戸板で運ばれました。松平家初代頼重は、継信を顕彰するため、遍路道脇に記念碑を建てており、この碑も見物したと思われる。



八十五番八栗寺から屋島を望む

竜宮伝説と海女の墓

八十六番志度寺（さぬき市）では、海女の玉取伝説が書きとめられ、海女の墓にも参っています。志度寺は、推古天皇の時代に流れ着いた霊木で本尊十一面観音像を造り、藤原不比等・房前父子によって再興されたことが重要文化財「志度寺縁起」に描かれています。唐の皇帝から藤原鎌足に贈られた宝珠が志度沖で竜神に奪われます。海女と結婚した不比等は、宝珠奪還を依頼し、海女は乳房を切って珠を隠して奪還に成功しますが絶命して

しまいます。その子房前が志度寺を再興するのです。志度寺沖は、竜宮につながり、浄土につながる海と信じられていました。

玉取伝説は、能の演目としても知られ、祭礼彫刻や刺繍にも多用されています。この地には、海女の墓や房前・真珠島などの地名が残り、伝説を今に伝えています。



八十六番志度寺の海女の墓

讃岐の風景

道沿いの風景が記録されているのも、この日記の特徴です。丸亀城下町には、うどん屋があり、坂出村には、塩田が多く、引田に至る村々では、全て砂糖を作っていることが記録され、貴重な産業史料となっています。広大な塩田風景や、牛が回ってサトウキビを搾るため、円錐形をした砂糖締小屋は特徴的な光景として印象に残ったことでしょう。

志度の町は、大きな門前町として記録されますが、泊ったのは宿屋ではなく、無料の善根宿でした。この町では「修行」と称して「門付」（寄付依頼）をしています。筑前を代表する豪商が行うこれらの行為は、四国遍路の原点である「修行の旅」の姿と、旅人・住人ともに救済する弘法大師への信仰をよく表しています。

【参考文献】

伊予史談会『四国遍路記集』伊予史談会双書、1981
塚本明・近藤浩二・胡光「巡礼と『道中日記』の諸相」『2013年度四国遍路と世界の巡礼公開講演会・公開シンポジウムプロシーディングズ』愛媛大学「四国遍路と世界の巡礼」研究会、2014
愛媛大学四国遍路・世界の巡礼研究センター編『四国遍路の世界』ちくま新書、2020
愛媛大学四国遍路・世界の巡礼研究センター編『四国遍路と世界の巡礼（上）最新研究にふれる八十八話』創風社出版、2022